

の祖 赤水 (1717~1801)

江戸時代の儒学者である。高萩市赤浜の農家に生まれ、第六代水戸藩主治保の侍講（教師）となり、江戸に勤務し、理学・天文学・農政学等多岐の分野にわたる研究成果を『赤水』にまとめた。3月19日、国は赤水資料750点を歴史資料として重要文化財指定した。



赤水を育んだ社会情勢

江戸時代の武家は、その地位を保持する上から子弟を学び継承する心づもりで、藩校を設けて立派な学問として儒学を学んだ。また、藩主は自分の政策を高めるために儒学者を招いて講義をさせ、重臣たちにも聴講させた。一方、庶民は寺子屋や私塾等で学び、赤水も幼少で塾生で学んだ。第二代水戸藩主の徳川綱吉は、「久松公定」編纂のために存在する影絵巻を小石川に開設（1663）。その往々にて徳義を水戸へ移動させて水戸影絵巻を完成（1697）するなど、学芸振興の政策を取った。影絵巻には全国各地から集められた資料が納められ、次第により研究が進められた。光圀の死後、学芸振興の機運は失われて停滞しましたが、第六代水戸藩主治（赤水を得た藩主）の時代になってようやく復興した。赤水と親交のあった血脈派は影絵巻の複製、学芸の振興に影絵巻館を移す等があり、赤水は影絵巻の資料を観覧する機会にも恵まれていた。また、学芸、文化の発展が庶民によって進められた時代、赤水は各地の文化人と遊んで交流し、多くの知人から豊富な情報を得ることができた。



赤水図（改正日本輿地路程全図）の変遷を比較しよう！！

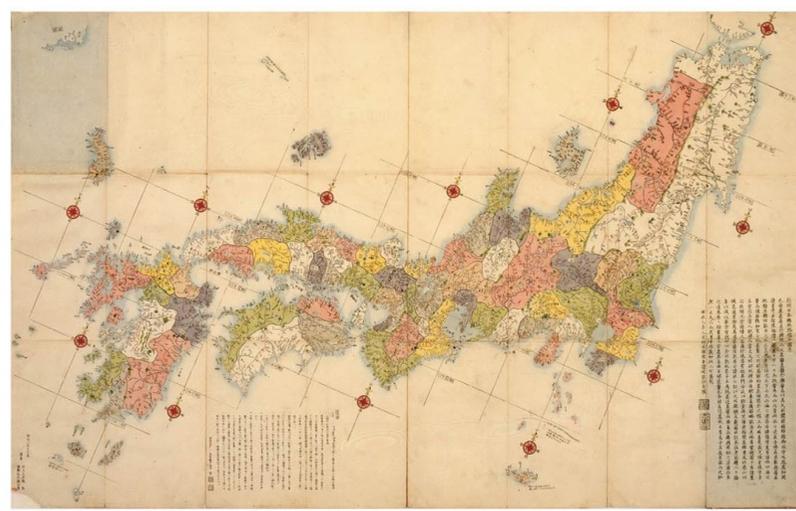
ここでは、高萩市歴史民俗資料館が所蔵している原図、初版、第2版、第3版、第4版、第5版の6図を掲載して、長久保赤水（1717~1801）の「改正日本輿地路程全図」の変遷を紹介する。江戸時代後期の約100年間のベストセラーであり、吉田松陰や江戸時代の庶民、さらには、伊能忠敬などが見ていた地図である。これらの6枚の地図の細部を比較すると赤水図の様々な変化と発見があることがわかる。

《長久保赤水関係資料693点》 国の重要文化財指定記念



原図 長久保赤水手書図 84.6×134.8 cm (全227×190 cm) 明和5年(1768)日本地図の原図 高萩市歴史民俗資料館蔵(長久保家寄贈資料)

20年以上の歳月を経て、この「改正日本扶桑分里図」(赤水図の原図)を製作した。地形や地名には胡粉による多くの修正痕や和紙を何枚も重ねて書きなおした跡が残る。赤水が考証しては、そのつぎ修正したことがみとられる。本図には、鹿島灘を塞ぐように貼紙が貼られており、そこには「改製日本(扶桑)分里図」と記され、明和5年(1768)の日本図の真称である。本図は「改正日本輿地路程全図」の原因と考えられている。しかし、今期の文化庁の調査で、赤地に付けられた「赤」は消去のしるしであると分かった。今まで使われていたの「赤」と思っていた「改製扶桑(日本)分里図」と表記してきたが、今後は「改製日本分里図」と改めて表記することにした。また、この図は「安井春海の所考」として、江戸時代の日本図である。奄美群島や琉球諸島は描かれていない。蝦夷地の南端、対馬、朝鮮半島南東端は描かれ、さらに日本海には竹島と松島が描かれる。



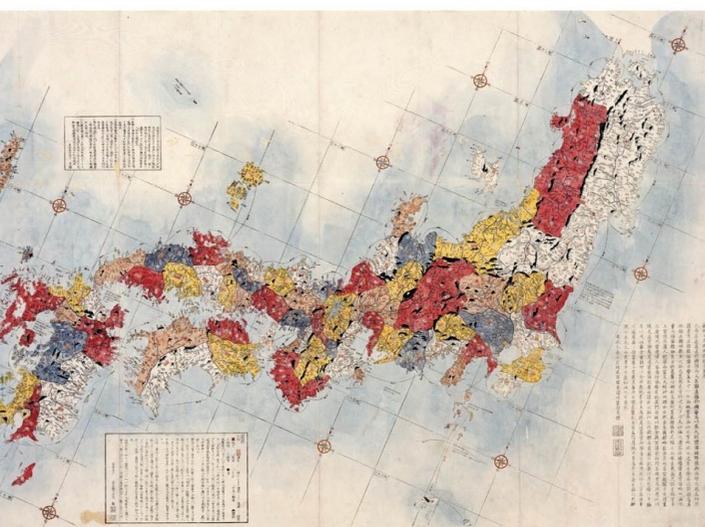
改正日本輿地路程全図 安永8年(1779)初版 81.8×131 cm 高萩市歴史民俗資料館蔵(長久保水戸藩系寄贈資料)

この「改正日本輿地路程全図」の初版は、安永8年(1779)に完成、翌年の春、大坂で出版された。この図は、10里(約40km)を1寸(約3cm)とする約129万6千分の1の小縮尺の日本図である。それまでの刊行日本図とは異なり、緯線と経線を引いた点で、画期的な刊行日本図である。大坂の書籍浅野孫兵衛より刊行。讃岐國の備前栗野山(1736~1807・寛政の三博士)の序文があり、赤水は栗山と学問的交流があったことがわかる。高萩市歴史民俗資料館蔵の安永8年版「改正日本輿地路程全図」は、4点あるが同じ刊行年であっても、何れも赤水が修正を加えていたことがわかる。本図には、右上部の大島・小島が書かれていない。また、下北半島は扇形に描かれており、下北半島をはじめ、吉河周辺の河川、半久沼と小川、館林、大和國の奈良・春日、讃岐國の星島などを比較するとその違いが分かる。4点の中では最も古いものである。さらに、約4,200の地名情報などが掲載されている。



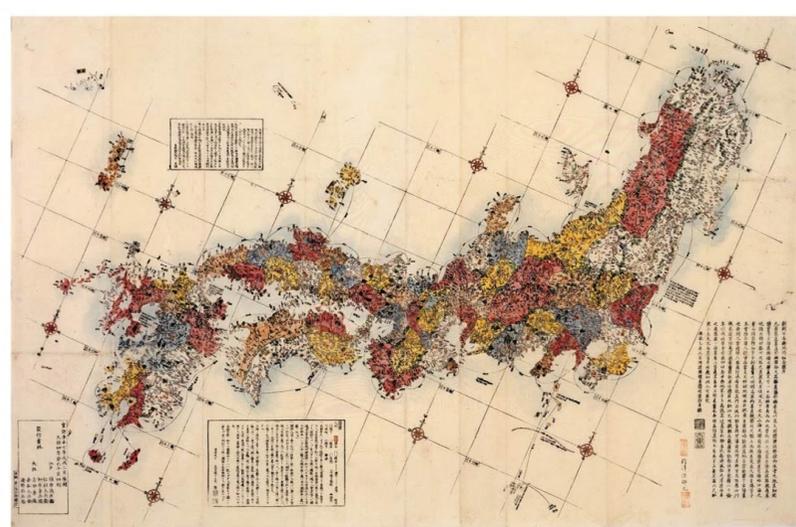
改正日本輿地路程全図 寛政3年(1791)第2版 83×128.5 cm (全134.5×179 cm) 高萩市歴史民俗資料館蔵(長久保家寄贈資料)

次に、赤水図の最大規模といえる第2版である。高萩市歴史民俗資料館蔵の寛政3年(1791)「改正日本輿地路程全図」の第2版は3点あるが、この図は着彩試作品と思われる。大きな違いとしては、海路(港から地までの距離)や部分図(郡名の記入)、図の左上の潮汐考証部の付加などが挙げられる。また、第2版から四つ倉沖には、初版にはない赤井がみられる。さらに、地名表記などの情報量も飛躍的に増加し、国の色分け彩色も変化した。赤水が存命中に編集したのは、最大規模といえるこの第2版図までである。初版と比べてみると、地名情報など約6,000枚の飛躍的に増加している。同じ赤水図でも初版とは、全くの別物であることがわかる。本図では、【是日伊豆七島】となっており、伊豆七島へ入っていない。赤水図はこれで完成した。第3版以降は、第2版の情報をそのまま使用することで刊行されていった。



日本輿地路程全図 文化8年(1811)第3版 85×129.7 cm 高萩市歴史民俗資料館蔵(横山功氏寄贈資料)

出版された地図。この第3版からは、大坂だけでなく、江戸でも販売され、東都：須原屋茂兵衛、浪華：浅野孫兵衛とある。その後、同じ第3版でも、東都1軒、浪華5軒と次第に版を重ねて、幕末までのベストセラーとなった地図である。



改正日本輿地路程全図 天保4年(1833)第4版 87×134.6 cm 高萩市歴史民俗資料館蔵(横山功氏寄贈資料)

赤水没後に出版された地図。この天保4年の第4版では、江戸：須原屋茂兵衛、大坂：松村丸兵衛、柳原春兵衛、吉田善蔵、赤松丸兵衛、浅野孫兵衛とあり、江戸1軒、大坂5軒となっている。



改正日本輿地路程全図 天保11年(1840)第5版 85.7×130.4 cm 高萩市歴史民俗資料館蔵(横山功氏寄贈資料)

赤水没後に出版された地図。この天保11年の第5版では、浪華書林：森本勘助、浅井(マツ)吉兵衛、柳原春兵衛、吉田善蔵、前川善兵衛、橋本徳兵衛とあり、浪華の6軒